

第7次調査の概要

1. 後円部頂の調査 第6・7次

(1) 埴輪列

第7次調査では、第5次調査で確認していた後円部頂外周埴輪列について、掘り方の精査と取り上げをおこなった。埴輪列を構成する円筒埴輪の底部、計56個体を原位置で確認した(図2・図12)。これらは直径約20mの円を描いて後円部頂を全周していた。復元すると150本程度の埴輪を樹立していたとみられる。埴輪列は溝状の掘り方を伴っているが、埴輪と埴輪の間の掘り方がくびれる形状を呈すること、1段深い掘り方をもつ埴輪があることからすると、埴輪ごとに坑を掘り、結果的に溝状になった可能性もある。掘り方の幅は検出面で40～60cmをはかる。深さは復元すると30cm以上あったと考えられ、底には数cmから数十cmの置き土を施していた。口縁の高さをそろえるためと考えられる。また、前方部頂へ続くスロープの埴輪列では、掘り方の底が外周埴輪列よりも1段深くなっており、続けて掘削されたのではないことを確認した。埋土に前後関係がみられないことから、埴輪の樹立はほぼ同時と考えられる。

埴輪列中の埴輪3個体の内部から、土師器を検出した。破損はしているが完形に近く、埴輪の底部とほぼ同じレベルで出土したことから、何らかの意図をもって入れられたものと考えられる。(東方)

(2) 墓 墳

第7次調査における墓墳の調査は、墳丘主軸に直交する南北第1サブトレンチから西へ4mの位置に新たに設定した南北第2サブトレンチにおいておこなった(図2)。墓墳の平面形や規模などは、すでに第5・6次調査でおおよそを確認していたが、今回さらに新たな知見を得ることができた。第6次調査の所見では、墓墳の平面形はほぼ正方形ながら南西隅がやや内側に入り込む不整形を呈するとしていたが、南北第2サブ

トレンチ東壁の土層観察および墳頂面の平面的精査の結果、南西側が約15m外側に広がることが判明し、南北約12m、東西約11mをはかる、ほぼ隅丸方形を呈する墓墳であることを確認した。

墓墳は、南北第1サブトレンチでは上部が緩やかな2段状になることを確認していたが、南北第2サブトレンチでは上部に段をもたないことが判明し、墓墳の一部においてのみ上部にテラス状の段が存在する可能性が高まった。(中條・岩本)

(3) 盗掘坑

埋葬施設まで達している盗掘坑を3箇所を確認した。いずれも竪穴式石室に対するもので、南側壁の東小

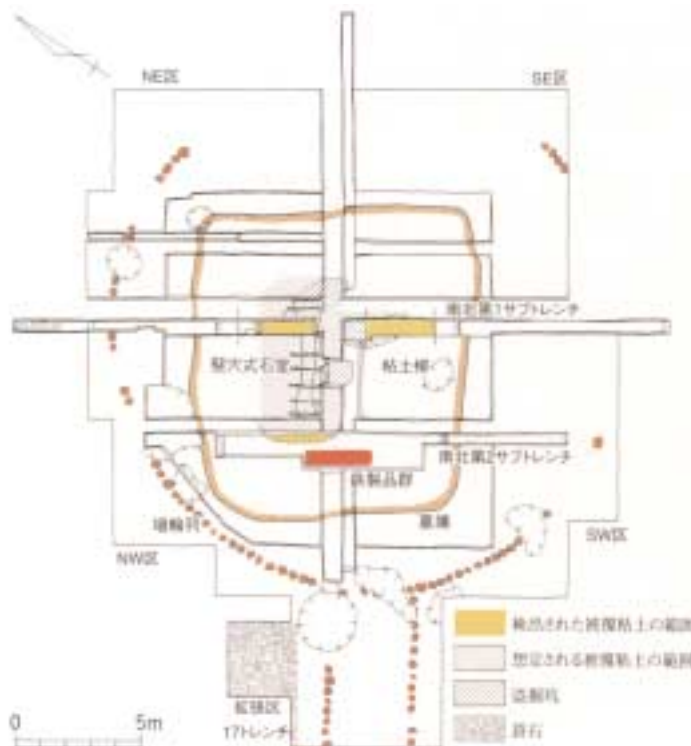


図2 後円部頂平面図(S: 1/300)